

RS

Ritsumeikan Style SPECIAL ISSUE
学園通信 Dynamic Academic 2011

国境を超えるグローバルリーダーへ

Become a Global Leader Beyond Borders

*English version available in the College of IR Office.

国際関係学部では、国際関係研究科への進学を目指す学部学生を対象にしたさまざまな制度を整備してきました。その一つは2006年度入学者を対象に開始された「早期卒業制度」です。この制度を利用することで国際関係学部生は学部3年大学院2年の5年間で修士(国際関係学)の学位を取得することができます。この制度により、2008年度から2010年度までの3年間で10名の早期卒業生を輩出、全員が国際関係研究科に進学しました。

その他、特徴ある入試制度は「育成型AO入学試験」です。大学院進学意思を持つ学部4回生を対象に、育成担当教員がついて大学院での研究準備を指導し、2年間の修士課程で成果が期待できる水準に達したと認定した段階で大学院入学を認めるものです。4回生から大学院での研究を意識して学修を進めることができます。この制度により、2008年度から2011年度までに14名が進学しました。

● 国際関係研究科博士課程前期課程進学/入学者構成

年度	2007	2008	2009	2010	2011
学内進学者(国際関係学部)	15	15	21	14	10
学内進学者(他学部)	9	5	7	6	3
他大学出身者	46	42	42	33	17
合計	70	62	70	53	30
(学内出身者比率)	34%	24%	40%	38%	

* 2011年度は、4月入学者のみ。

9 キャリア形成教育

1回生時から「アカデミック・キャリアチャート」への記入を通して進路への関心を高めるよう指導しています。また、企業研究やインターンシップなどのキャリア形成を意図した正課科目を充実させています。2000年度から実施してすっかり定着したゼミ対抗の「オープンゼミナール」は3回生ゼミの学びの成果を披露する場であるとともに、ゲストにおいていただく企業の方々から高い評価を得ています。

10 多彩な進路

こうした学部での充実した学びを経て、卒業生はさまざまな分野の進路に進んでいま

す。情報・交通・観光などのサービス分野、機械・化学・食品などの製造分野、卸・小売りなどの流通分野、銀行・保険などの金融分野、新聞・テレビなどのマスコミ分野、国家・地方公務員や教員の公務分野と、分野は多彩ですが、海外との取引など国際的な仕事に関わっている卒業生の多いことが国際関係学部の特徴です。

● 国際関係学部卒業生就職先の業界分野うちわけ(2010年度)

サービス	製造	流通商事	金融	その他
34.4%	32.2%	15.3%	10.9%	7.1%

IV 今後の学部教育の方向性について

以上のように、国際関係学部はこれまでさまざまな改革と国際化に対応するための改善に取り組んできました。今後はこうしたこれまでの成果を受け継いで、国際関係学部のカリキュラムと教育をさらに強化・充実するとともに、グローバル社会のなかで通用する人間を育成するために、次のような課題に取り組んでいきます。

- 2011年度改革によって改定された新カリキュラムが完成する2015年3月まで新カリキュラムを確実に実施していきます。とくに、すべての授業を英語で行うGS専攻の開講科目の適切性を点検しつつ、科目の補充・充実を図っていきます。
- IRナビの作成・改訂作業を行って学部ホームページに掲載するとともに、学生が国際関係学を学ぶ際に、国際関係学とはなにか、基礎分野をどのように学習していくのか、論文における引用の仕方や重要性など明確にしましたが、今後はそれを各科目や演習などで内実化させていきます。
- 小集団科目の内容確定と充実を図っていきます。基礎演習は新テキストを活用した基礎演習を実施していきます。また、グローバル・シミュレーション・ゲーミングと国際関係学セミナーの2回生小集団科目の内容を確定し、実施していきます。
- 新カリキュラムのもとで2回生から所属する3つのプログラムの特徴・独自性が強まるのに応じて、プログラムの特徴と理念を明確

にし、学生のプログラム選択において適切な指導を行うように努めていきます。

- 学部カリキュラムのなかで留学(DUDP、交換留学、1セメスター留学など)を有機的に位置付けて推奨します。すでにあるアメリカン大学とのDUDPやUBC国際リーダー養成プログラムとの連携を深めつつ、他のDUDPやプログラムを開拓していくとともに、国際関係学部カリキュラムとの連続性を追求していきます。
- 学部での学びの集大成となる卒業論文の指導・評価を充実させます。「卒業論文の書き方」を作成・配布してより丁寧な指導を実施することで卒業論文の質を向上させます。
- GS専攻の開設にとまない、グローバルに多様な学生を求めめるための努力をします。できるだけ多様な国籍の志願者を獲得するために、入試方式について総括し、改善していきます。
- 早期卒業制度の活用を含めて、大学院進学、公務員、民間企業就職等、多様な進路へのキャリア支援を充実させます。これまでのアカデミック・キャリアチャートの改善を行うとともに、学生ポートフォリオの導入を検討します。また、新たなキャリア科目であるプロフェッショナル・ワークショップと他のキャリア科目を充実させていきます。
- 学内から国際関係研究科への進学を目指す学部学生を対象にした学部独自の進学説明会を行います。とくに、大学院進学全般、進学後の海外大学院留学、大学院修了後の進路や就職についての情報提供を目的とした説明会を各セメスターで複数回開催するようにします。
- 国際学生のキャリア支援をするために、キャリアセンターと連携して取り組んでいきます。同様に、国際学生がインターンシップに参加できるように、インターンシップ提携先などを開拓していきます。
- 以上のような課題に確実に取り組んでいくための一環として、国際関係学部の教育・研究の国際化を支えるために、英語圏の大学などで教育研究経験の豊かな教員を任用していきます。新任教員との研究交流を含めて各教員が研究を進展させて教育に反映するように努めていきます。

I 国際関係学部を取り巻く状況

国際関係学部は1988年の学部設立以来、立命館大学の国際化の牽引車としての役割を果たしてきました。APU(立命館アジア太平洋大学)や国際インスティテュートの設立を伴い、この23年間で立命館大学は目覚しく国際化を進展させました。国際学生の受け入れにおいても、国内学生の送り出しにおいても、大きな成果を上げてきました。国際関係学部学生の英語力も向上し、いまや英語の専門科目が開講される(2011年度は15科目)など、国際化と国際関係学を学ぶ基盤は着実に進展しています。

しかしながら、国際関係学部が設立された1988年の時点に比べると、日本社会の国際化や世界のグローバル化ははるかに進展しており、立命館大学自体の国際化と国際関係学部の国際化および国際関係学カリキュラムの充実さらには高度なレベルで要求されるようになってきました。いまや世界の有力大学は国境・国籍を越えて世界の学生を相手に教育する時代です。立命館大学も国際関係学部も、このようなグローバル化が進展した世界でどのような人間を育成するのかが問われています。立命館大学が拠点のひとつとして採択されたグローバル30(文部科学省の国際化拠点整備事業)もそのような文脈として位置づけられます。

さらに、国際関係学部を取り巻く環境はこの間、大きな変化を遂げてきました。設立当時は関西ではじめての国際関係学部として注目を集めてきましたが、いまや国際関係学部の受験者数の減少、関西有力私立大学における国際系・外国語系学部の新設による競争の激化、アジア諸国から欧米の大学への国際

学生の急増といった状況のなかにあります。こうしたなかで、グローバル化の進展に対応すべく、国際関係学部は自らの独自性や特徴—アイデンティティとミッション—の確立に励んでいます。こうした状況のもと、国際関係学部はさらなる発展のために現状を見直し、いわゆる2011年度改革に励んでいます。

II 国際関係学部の目指す教育

立命館大学国際関係学部は2011年度改革を実施し、さらなる国際化と国際関係学部の独自の魅力—アイデンティティ—の形成に取り組んでいます。国内外の他大学の国際系学部と比べて、立命館大学国際関係学部の教育課程の特徴は以下の点にあるといえます。

1 国際関係学部の人材育成目標

国際関係学部は4年間の教育を通じて学生のみなさんが次の6つを達成することをめざしています。

- 国際社会が直面する戦争、武力紛争、貧困、環境破壊、差別などの多様な諸問題について、問題意識や知的関心をもつことができる。
- 国際秩序平和、国際協力開発、国際文化理解に関わる国際関係学の諸分野の学問内容および方法を理解する。
- 国際社会に関して自ら設定した問題について、国際関係学部の諸分野の研究手法を用いて学問的に分析し考察することができる。
- 国際的な情報の収集・利用・処理に関するリテラシーを高い水準で身につける。
- 国際社会に関わる事実や主張を、日本語お



よび外国語によって、論理的に、かつ多様な文化的コンテクストに即して口頭および文章で表現し、コミュニケーションや討論を行うことができる。

習得した国際関係学の知識を留学、インターンシップなどの学外での学びや自らの進路開拓と関連づけ、国際機関・国際ビジネス・国際NGOなどの多様な国際的舞台上での実践に活かすことができる。

すなわち、国際関係学部は国際関係への深い知見と国際社会における行動力を有する人間を育成することを目的としています。

2 国際関係学部の教育課程の特徴

2011年度改革に基づいて新カリキュラムがスタートしたことで、現在は旧カリキュラムと新カリキュラムの両方の学生が在学する移行期にありますが、国際関係学部では旧カリキュラムと新カリキュラムのいずれの学生にとっても同質の教育と学習の機会を保障することに努めています。

- 2つの専攻、3つのプログラム、クロス履修
国際関係学部は国際関係学専攻(IR専攻)とグローバル・スタディーズ専攻(GS専攻)

の2つの専攻があります。IR専攻は主として日本語で国際関係学を学ぶ専攻です。2回生からは国際秩序平和プログラム、国際協力開発プログラム、国際文化理解プログラムの3つのプログラムに分かれます。旧カリキュラムでは、国際秩序平和コース、国際協力開発コース、国際文化理解コース、国際行政コースの4つのコースがあります。GS専攻は主として英語で国際関係学を学ぶ専攻です。入学後、Governance and Peace Program、Development and Sustainability Program、Culture and Society Programに分かれます。

国際秩序平和プログラム(国際秩序平和コース)とGovernance and Peace Program、国際協力開発プログラム(国際協力開発コース)とDevelopment and Sustainability Program、国際文化理解プログラム(国際文化理解コース)とCulture and Society Programは互いに対応関係にあるプログラムといえます。IR専攻もGS専攻も使用言語が異なるだけでカリキュラム構成は共通しており、それぞれの専攻の学生は特定基幹科目等を除いて自分と異なる専攻の講義科目を履修することが出来ます(クロス履修)。また、新たに任用されたGS専攻の先生方を中心として数多くの英語の授業が開講されるようになりましたが、旧カリキュラムの学生もこれらの講義科目を履修することができます。

④理論、地域研究、言語の有機的統合

国際関係学部では、固有専門科目を履修するなかで個々の学生は自分のディシプリンを明確にしていきます。国際関係学部で扱う主題は国際関係学的諸問題ですが、政治学、経済学、社会学といった基礎科目は対象を分析する際のアプローチの起点です。個々の学生は学びの焦点を明確化するために、基礎となる理論の習得をします。また、こうした基礎理論の習得とともに、地域研究科目の履修と言語の習得に努めます。

国際関係学部のカリキュラムは全部で9つの言語(英語、フランス語、中国語、スペイン語、ロシア語、アラビア語という国連公用語、

ドイツ語、朝鮮語、日本語)の教育、世界全地域を網羅する地域研究科目、そして政治学、経済学、社会学等の理論(ディシプリン)の科目を学部カリキュラム全体として有機的に統合しています。

⑤国際関係プロフェッショナル・サブプログラム

国際関係学部は国際関係分野のプロフェッショナルを育成することも重要なミッションとして位置づけています。IR専攻およびGS専攻のいずれの学生も国際関係プロフェッショナル・サブプログラム(International Relations Professional Subprogram)に参加することができます。このサブプログラムの中核は3回生前期に受講するプロフェッショナル・ワークショップです。公務(国際機関/国際協力)、ビジネス、ジャーナリズムという進路別に3種類のプロフェッショナル・ワークショップが開講され、学生はどれか希望するワークショップを受講します。プロフェッショナル・ワークショップの受講に加えて、3つの進路別に受講を推奨する科目群があります。

⑥国際関係学部と国際関係研究科の連携強化

国際関係学部/国際関係研究科は国際関係学士、修士、博士のすべての学位のプログラムを擁する日本で最も包括的に充実した国際関係学スクールです。とくに、国際関係研究科は国際関係学プロフェッショナルスクールを持つ世界の著名大学が加盟するAPSIA(Association of Professional School of International Affairs)の日本唯一の正規加盟校としてグローバルスタンダードの国際関係学プログラムを提供しています。学部学生はどの専攻、プログラムに所属していても、早期卒業制度、飛び級制度を活用して、学部3年+修士課程2年の履修プランを追求することができます。

Ⅲ 国際関係学部の4年間の取組み(2007年~2010年)

1 成果発信の充実

国際関係学部は学部生の成果や情報を積極的に発信することに努めてきました。そのひとつは2008年度から取り組んでいる「基礎演習レポート集」の発行です。基礎演習は1回生が大学生としてはじめて取り組む演習で、前期、夏期休暇、後期と3回のレポートが課されます。各クラスの夏期休暇レポートと後

期レポートから合計原則4本の優秀レポートを冊子にまとめ、次年度の1回生の参考にしています。掲載を目指してのレポートの質の向上、また、レポートが掲載された学生には印刷物として他の人の目に触れるという充実感と緊張感をもたらしています。

また、GSG(グローバル・シミュレーション・ゲーミング)の報告集を2009年度から発行しています。GSGは2回生全員が履修するバーチャル・リアリティ・ゲーミングですが、前年度の実績を記録して公開することで、事前学習を効率的に行って精度の高いゲーミングの実現に貢献しています。

さらに、以前よりホームページ上で公開してきた「IRナビ~国際関係学部で学ぶために~」を2009年度より冊子印刷し、1回生に配付しています。ネット上だけでなく「手元で見ることができ、基礎演習などでの活用が増えています。さらに2011年度には卒業論文の書き方と剽窃^{ひようせつ}についての項目を付け加えました。卒業論文の提出率は90%以上と高いのですが、これらによってより質の高い卒論が増えると期待されます。

2 学びの実態調査を実施

2010年度から学生のみなさんの学習経験や学部教学に対する達成感などを知るため、「学びの実態調査」を行っています。2010年度の3回生対象の調査結果によると、普段の授業の取り組みとして、「授業で出された宿題や課題をきちんとする」、「履修登録した科目は途中で投げ出さない」などの真剣な態度が多くみられます(いずれも「とてもあてはまる」と「よくあてはまる」の合計は約82%)。その結果、「国際的な視野」や「社会や文化の多様性を理解し、尊重すること」が「とても身についた」あるいは「ある程度身についた」とする学生がいずれも約86%います。また「自分の知識や考えを文章で論理的に書くこと」、「ものごとを批判的・多面的に考えること」、「他人と協力しながらものごとを進めること」が「とても身についた」あるいは「ある程度身についた」と答えた学生はいずれも約82%でした。国際関係学部での学びが、単なる知識やスキルの習得ではなく、真の国際人として必要な視野の広さや異文化への理解、また、理論的な思考とそれを表現する力を体得するものとなっています。

しかし、課題がない訳ではありません。平均的な1日当たりの授業時間以外の学習時間が1時間未満の学生が24%、2時間未満を含めると57%となります。1回生に高校時代の

平均的な1日当たりの授業時間以外の学習時間を尋ねた質問では1時間未満は19%、2時間未満を含めると42%でした。直接的な比較はできませんが、受験期よりも自学自習の時間が減っているようです。前述の人材育成目標との関連でいえば、例えば「(3)国際社会に関して自ら設定した問題について、国際関係学部の諸分野の研究方法を用いて学問的に分析し考察することができる」の達成度は約60%でした。人材育成目標の達成のためにも、「語学以外の授業で、外国語で行われる授業」や「提出物に教員からのコメントが付されて返却される授業」(いずれも「あまりなかった」と「ほとんどなかった」の合計がそれぞれ55%、70%)などの充実が必要であるといえます。

3 留学生数の増加

2000年代前半の留学生比率は約5%でしたが、近年は10%程度となっています。2011年9月にはGS専攻の約20名の留学生が加わる予定で、留学生比率はGS専攻で約50%、学部全体で18%程度となります。留学生の増加にともなって学部内に英語をはじめさまざまな言語が行き交い、グローバルな雰囲気も満ちてきました。

●国際関係学部「留学生」入学者数

入学年度	2007	2008	2009	2010	2011
留学生数	31	36	38	32	45
入学者に占める割合	9.3%	11.3%	11.1%	9.6%	13.1%

*入学者には、編・転入学者を含む。
*留学生とは、在留資格が「留学」の者。
*2011年度は、4月入学のみ。

4 英語教育の充実と留学派遣の増加

国際関係学部の英語教育は、①1回生での集中的学習、②学部教学と関連したコンテンツ・ベースの授業内容、③できるだけ英語を用いて授業運営を行うこと、を基本方向としています。2009年度からは、新たに1回生の英語教育において、①日本人教員の授業でもクラスのレベルや学生の理解度も考慮しつつ、できるだけ英語を使って教える方向に転換したこと、②外国人教員のクラスでは第2セメスターからライティング重視の方向に変えています。これらの取組みの結果、学部生全体として確実な英語力の獲得がすすんでいます。そのひとつとして、TOEFL®のスコアの伸びがあります。1回生の入学段階(4月)と11~12月のTOEFL®スコア結果を見ますと、毎年14~23点平均点が伸びています。国際関係学部生のTOEFL®スコア結果は、

平均点ばかりでなく平均点の変動状況も、立命館大学全学部において最も高い数値を示しています。

●国際関係学部1回生TOEFL®-ITP平均点変動状況

年度	2007	2008	2009	2010	2011
入学段階(4月)	469.3	473.1	480.2	479.1	478.5
11月もしくは12月	490.2	487.6	503.2	496.6	—
増減(点)	+20.9	+14.5	+23.0	+17.5	—

また、2003年度から「英語・国際研究」を開講し、2005年度から国際インスティテュートおよび留学生以外の学生を対象に登録必修、2011年度新入生からは全員を対象に登録必修としました。この科目は「英語で英語を理解する」ことを目標に、国際関係学の諸分野の文献を読み込む授業です。2回生前期に全員がこれを受講することにより、学部生全体として確実な英語力の獲得がすすんでいます。

こうした英語教育の充実は海外に留学する学生を多く輩出する礎となっています。正規プログラムにより留学する学生は2010年度179名、渡航休学を行う学生は2010年度39名と、1学年あたり3分の2以上、短期の学生などを加えると、相当数の学生が在学中に海外留学を経験しています。留学を経験した学生は、帰国後も高い意志をもって勉学に励んでいます。

5 基幹科目・専門科目の充実

学部の基幹科目である国際関係学は、ほとんどの学生が受講するため、クラスの人数が多いことが課題となっていました。そのため2009年度から2クラスを設け、1クラス約150名となるようにしました。このことにより授業の浸透度が増し、きめこまかな質問対応ができるなどの効果が出ています。

また、英語による専門科目を増やし、前述の英語・国際研究などで培った英語力を継続的に伸ばすことを目指しています。これらの専門科目を留学前に受講して海外での授業に備えたり、帰国後の英語力維持を図ったりしている学生もいます。

6 小集団教育の充実

基礎演習、国際関係資料研究、および専門演習の1年次から4年次にわたる小集団教育が充実していることは国際関係学部の特徴のひとつです。そのなかで、基礎演習は2005年度から後期に希望者による英語クラスを開講しました。報告、討論、レポートのすべてを英語で行うこのクラスは毎年約20~30名

の参加となり、授業では活発な議論が戦わされています。英語クラスは基礎演習の学習の総まとめともいえるゼミナール大会でも優秀な成績を残しています。

英語クラス基礎演習の参加者は、海外経験が長く英語が堪能な学生もいますが、そうではなく、むしろこのクラスに挑戦することで自らの英語力の向上を図る学生もいます。英語クラス基礎演習を運営してきた経験はGS専攻の展開に大いに役立っています。

また、基礎演習では学部スタッフによる独自テキストを作成しています。『プロブレマティック国際関係』(1996年)、『クリティック国際関係学』(2001年)、『ニューフロンティア国際関係』(2006年)につづく第4弾として、『エティック国際関係学』を2011年に刊行しました。ますます深化するグローバル化に対応し、国際社会における重要課題を真剣に考えるよう、新入生に問いかけるテキストです。

●英語による基礎演習受講者数

年度	2007	2008	2009	2010
受講者数	25	33	29	21

7 附属校との連携

附属校の生徒には国際関係学部への進学希望者が多くいますが、進学を考えながらも進学後にどのような学習をするのか不安に感じている人も多くいます。国際関係学部に興味を持っている高校3年生の生徒を対象に、夏休みにIRセミナーを開催しています。IRセミナーではあらかじめ入門レベルの文献を読む課題を与え、それに基づいて2日間の集中セミナーを行います。とくに京都セミナーでは立命館高校、立命館宇治高校、立命館守山高校3校の生徒が共同して調べ学習とプレゼンテーションを行い、進学の意思を高めています。

また、附属校の国際社会入門(立命館高校)、平和開発論(立命館宇治高校)などの科目では国際関係学部の教員が赴いて授業を行っています。高校生向けに分かりやすくもハイレベルな授業を展開し、国際関係学への興味を喚起する役割を果たしています。

8 大学院との連携

2007年度以降2011年度までに、国際関係学部から累計75名が国際関係研究科に進学し、学部での学びの成果をさらに発展させています。

